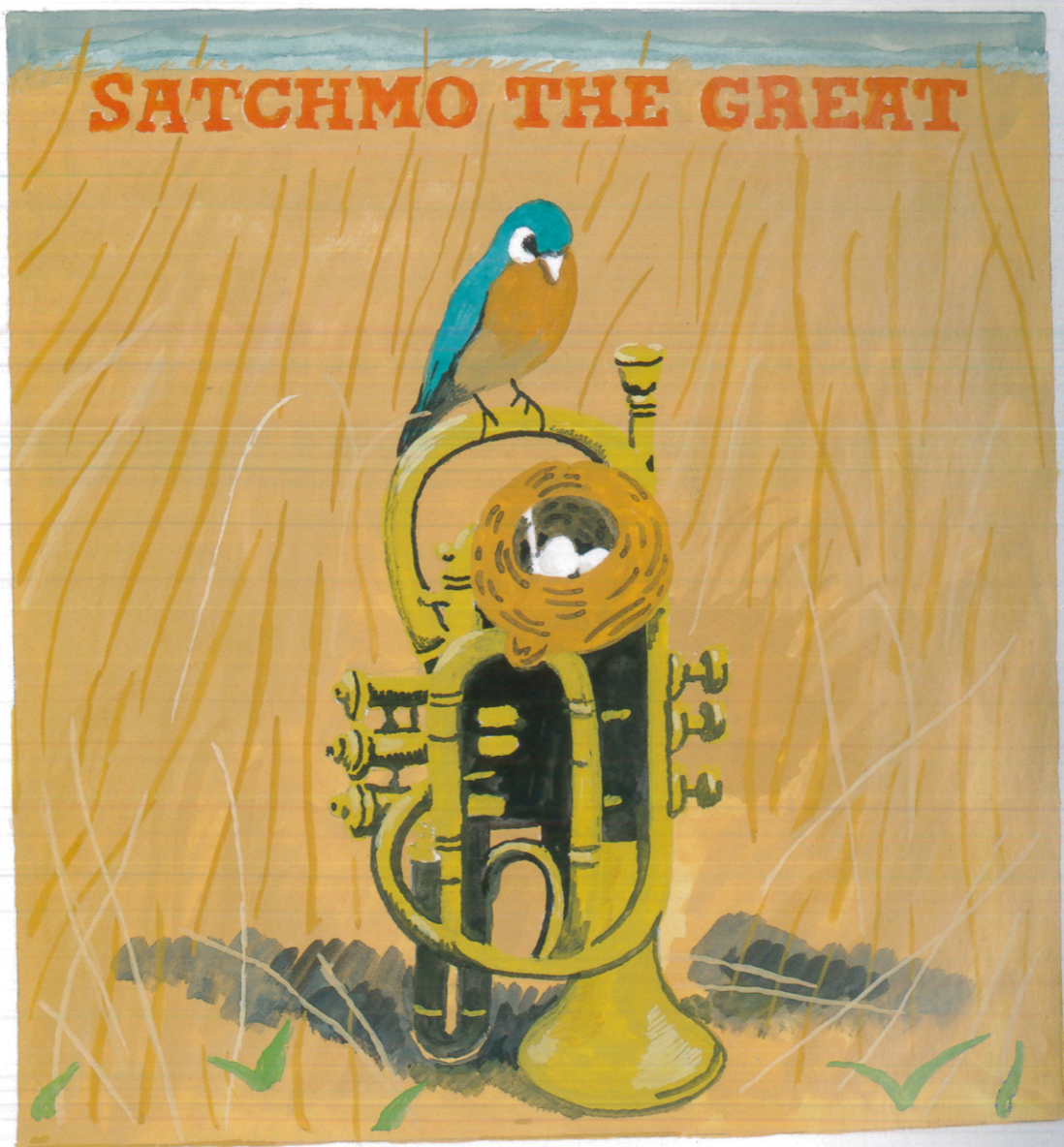


週刊文春

8月4日号 定価400円



週刊文春 八月四日号

昭和三十四年四月二十一日第三種郵便物認可
平成二十八年八月四日発行(木曜日発行)七月二十八日発売

第五十八巻 第三十号

編集人 新谷 学
発行人 鈴木 洋嗣

東京都千代田区紀尾井町三十一-三
郵便番号 一〇二一八〇〇八

株式会社文藝春秋 代表取締役 03(3265)1211

定価四〇〇円
次号発売まで

本体三七〇円

のんだあとにはサイクル。① サントリー食品インターナショナル株式会社 サントリーフーズ株式会社 <http://suntory.jp/GOMAMUGICHA/>

水と生きる SUNTORY

血圧 130

超えたら

胡麻麦茶



血圧が高めの方に
すっきり香ばしい
胡麻麦茶
SUNTORY

【飲み方】お湯はブレイブアードをお好みで。血圧が高めの方に適した飲料です。※血圧高めの方は、収縮性血圧(収縮性血圧においては130~139mmHg)に該当する方になります。食生活は、主食、主菜、副菜を基本に、食事のバランスを。

雑誌 20401-8・4



4910204010865
00370

Printed in Japan
凸版印刷株式会社印刷

生前本誌に
語った

がん闘病のポリシー

医療ジャーナリスト
長田昭二

大橋巨泉「疑わしきは切る」



ジャズや競馬などにも造詣が深かった

「どうぞ大橋巨泉の闘病生活に『アップラー』をあげて下さい」

七月十二日、タレントで評論家の大橋巨泉氏が亡くなった。享年八十二。死因は急性呼吸不全だったが、寿々子夫人は冒頭のようにコメントを発表し、さらに「最後の在宅介護の(医師の)痛み止めの誤投与が無ければと許せない気持ちです」と打ち明けている。モルヒネなどの医療用麻薬は、適正な使用方法を守れば安全なのだが、遺族としては無念さを隠せないのだろう。巨泉氏は晩年、二〇〇五年に胃がん手術をしたことにはじまり、中咽頭がん

五十三歳で亡くなった母への誓い

○五年四月、巨泉氏は千葉市内の民間病院でいつもの人間ドックを受け、医師からの進言で再検査を受けた。その後、テレビの旅番組収録のためにパリに飛んだ。そこで弟からのメール

と三度のがん手術と四回の放射線治療を受けるなど、がんと闘い続けていた。筆者は二〇一三年、胃がん手術から五年以上たった巨泉氏に、本誌の「がんからの生還」という企画でインタビューをしてもらった。しかし、その直後、巨泉氏が中咽頭がんを発症したため、原稿は未掲載のままだった。このインタビューで巨泉氏は、自らの闘病について

「その時に感じたのは、ああ、来たか」というもの。ショックや悲しみではなく、いざれやって来ると思っていたものが訪れた、という

「その時に感じたのは、ああ、来たか」というもの。ショックや悲しみではなく、いざれやって来ると思っていたものが訪れた、という

○五年四月、巨泉氏は千葉市内の民間病院でいつもの人間ドックを受け、医師からの進言で再検査を受けた。その後、テレビの旅番組収録のためにパリに飛んだ。そこで弟からのメール

というデメリットはある」と説明を受けました。「開腹して下さい。そして、立派に切ってください」と

巨泉氏はこの時、母のことを考えていたという。「母は僕が大学三年の時に子宮がんで亡くなりました。五十三歳でした。当初、医師の診断は子宮筋腫。結果として誤診でしたが、当時の医療水準では仕方がない。でも、『手術をして腫瘍を取ったほうがいいのでは』と不安がる母に、先生は『大丈夫。閉経すれば消えます』と答えていた。手術をしなくても消えるなら、無理に痛い思いをする必要もない。母は、医師の言葉を信じて病気を放置しました。

息を引き取った後、母の亡骸を触ると、ゴルフボールより少し小さいしこりが体中のリンパ節にありました。しこりは胸や腋の下にたくさんあった。骨と皮だけの体に、がんだけが、たくさん。その時に僕は母に誓ったんです。「僕はこれから何といわれても、疑わしきは切る」と

感覚。意外に冷静でしたね(巨泉氏以下、特に断りのない発言はすべて巨泉氏)巨泉氏が胃がん宣告を受けたのは、パリのホテルのことだった。「あまりいい知らせではありません」

そう始まるマネジャーを務める弟からのメールは、検査でがんが見つかったことを知らせるものだった。巨泉氏は一九六八年から四十五年間、春に受ける人間ドックを一度も欠かしていなかった。

「僕は実存主義者で、人間は死んだら無になると考えている。人間が『ある』という価値を持つのは、生きていなければこそ。ならば、その価値を長く続けるための努力はすべきだろう」と

「撮影が終わったら、女房と僕はプライベートでフィレンツェ、ロンドンを経てカナダに渡る予定でした。次に日本に戻るのは九月。弟の話では、一刻を争う状態を受けたのだ。

「撮影が終わったら、女房と僕はプライベートでフィレンツェ、ロンドンを経てカナダに渡る予定でした。次に日本に戻るのは九月。弟の話では、一刻を争う状態を受けたのだ。

た。腸管が正しくつながっていないことを示す最初の現象は、『おなら』ですが、寝たきりでは中々出ないんです。病室でテレビを観るにも、横にならずに腰を掛けるようにしていました」

その後は順調に快復し、胃がんの根治を示す「術後五年生存」も、二〇一〇年にクリアした。巨泉氏の「疑わしきは切る」という母への誓いは徹底していた。

「以前、後頭部にイボができたことがあります。医者は九九%心配いらぬと言ったんだけど、僕は『一〇〇%でないなら切ってください』と医師を説得して切ってもらった。取ったイボは良性だったけど、僕は後悔していません。良性だったのは結果論だから。

僕は自分が納得すればそれを守るし、一度決めたことはやり抜く性格。だからこそ、納得するまでは勉強するし、意見を求める。まだ誰もそんなことを言っていない時代から、セカンドオピニオンやサードオピニオンを取ってきた。これも

況ではないが、九月まで放っておくとどうなるか状況が変わる可能性があるとのこと。それでフィレンツェ以降のスケジュールをすべてキャンセルして、東京に戻ることにしたんです。

私がこの時点で知っていたのは、胃の中央部に名刺より一回り小さい程度の面積、厚さ一・二ミリほどの早期がんがある——ということだけ。冷静ではあったけれど、死を意識しないわけでもなかった。いま思えば、パリに来るのもこれが最後かもしれないと考えたんでしようね。毎晩女房と高級ワインを飲みながら、フォアグラのソテーばかり食べていました(笑)。

六月三日に帰国すると、三日後に築地の国立がんセンター(現国立がん研究センター)中央病院で精密検査を受けました。担当した内視鏡部長(当時)の斎藤大三先生から『立派ながんですが、内視鏡で確実に切除できる。内視鏡なら術後の痛みも小さいし、リハビリの必要もない。ただ、内視鏡だと転移の有無が不明確

自分が納得するための努力なんです」

一方で巨泉氏は、医学の限界も知っていた。「トム・ワトソンとゴルフをした時に、『君は球の行方を見過ぎる』と指摘されたんです。それじゃダメなのかと訊いたら、彼はこう答えた。『球を打つまでは自分の技術。打った後は神の意思』。なるほどと思いましたが、できることは打つ瞬間までの努力です。これは医療にも言えることで、病気になるって治療を受けるまではできる限りの努力をすべきです。でも、治療のことは、神のみぞ知る。ならば神様の手に渡る前に、最善の策を講じるべきだろうって。ただし、ここでいう神様とは、限りある人間に対して万能の存在があるならば、という意味。何しろ僕は無神論者だからね(笑)」このインタビューの最後に、巨泉氏は「いつか、自分が存在を認めることのない天国で、愛する母に『よく頑張ったね』と褒められることを夢見ている」と語っていた。